発掘調査の概要

藤原宮東面中門・東面大垣の調査（飛鳥藤原第168-2次）

藤原宮は周囲を掘立柱の大垣により区画され、東西南北には各々３つの宮城門があったとされます。今回の調査ではこのうち東面の中央門（建部門）とこれにとりつく東面大垣を検出しました。調査期間は2011年７月21日から８月30日までで、調査面積は200㎡です。

調査では、まず、大垣推定位置で南北に並ぶ長辺２m、短辺1.5mほどの巨大な柱穴が予想どおり３基みつかりました。ところが大垣は調査区北側で途切れ、かわりに礫の詰まった穴が東西に３基ずつ２列並んでいました。これらは柱をのせる礎石の据付穴とみられ、この場所に礎石建物があったことを示します。東面大垣中央に設けられた礎石建物となると門以外に考えられません。東面中門の南妻（みなみつま）部分とみて間違いないでしょう。宮城門の調査例は今回で６カ所目ですが、本例は特に遺存状態が良好でした。

更に、２基の礎石据付穴を壊して掘られた土坑を断割調査した結果、中から巨大な礎石が２石みつかりました。藤原宮廃絶後に農地化の妨げとなった礎石を、穴を掘って落し込んだのでしょう。礎石の大きさは藤原宮中枢部の礎石建物にも引けをとりません。東面中門がそうした建物に匹敵する規模と格式をもっていたことを教えているのでしょうか。

東面中門が将来その全貌を現せば、更なる成果がもたらされるでしょう。ご期待下さい。

（都城発掘調査部　森先 一貴）

落し込まれた礎石（南から）

藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第169次）

2011年４月から11月中旬にかけて藤原宮朝堂院朝庭の発掘調査を実施しました。本年の調査区は朝庭の中央北寄り（大極殿院南門の南約70m）に位置しています。朝庭の空間利用のあり方を検討するとともに、下層に存在する藤原宮造営期の遺構を具体的に把握することを目的に調査をおこないました。

これまでの調査で、朝庭は径５～10cmの礫を敷き詰めて整備されたことがわかっています。今回の調査区内でも同様に礫敷を検出しましたが、全体的に礫の遺存状況は良くありませんでした。礫敷上では、礫敷と一体的に設けられた南北方向の石詰暗渠を検出しましたが、その他に遺構は確認されませんでした。この点は、今回の調査区の範囲がまさに広場の中央部分であったことを示すものといえます。

これに対して下層調査では、藤原宮の造営に先行して設置された朱雀大路やそれにそって並ぶ柱穴列、造営時の資材運搬に用いられた運河、掘立柱建物などを検出しました。先行朱雀大路や運河は、以前の調査で確認されていたものの延長部分にあたります。これまでに検出された運河の総延長は570m以上となりました。また、掘立柱建物は今回の調査区内で６棟を確認し、少なくとも３時期にわたって建て替えがなされたことがあきらかになりました。藤原宮中枢部にあたる朝庭の下層で多くの遺構を確認したことにより、藤原宮の造営過程をこれまで以上に詳しく復元していく手がかりが得られました。

なお、11月５日に開催した現地説明会には、降雨にもかかわらず、620人もの参加者がありました。藤原宮の調査に多くの方々が関心を寄せていることを改めて実感しました。（都城発掘調査部　廣瀬 覚）

調査区全景（東から）